

～新しくなる 肱川橋とともに 大洲の町を再発見～

発行元
肱川橋橋梁架替工事連絡協議会



住所／大洲市大洲737 大洲高等学校内
電話番号／0893-24-4115 (大洲高等学校)
開館時間／8:20～16:50
(大洲高等学校にて事前受付が必要)
休館日／土・日曜、祝日(休校日に準ずる)
入館無料
※駐車場は校内の駐車スペースを利用



江戸時代の高名な陽明学者・中江藤樹 彼が若き日々を過ごしたゆかりの地を訪ね 「知行合一」の精神を感じる。

至徳堂



邸内に鎮座する藤樹先生木像



毎年5月頃に「遺愛の藤」は見頃を迎える



大洲高校の敷地内には、中江藤樹が実際に使っていたといわれる井戸が残っており、「中江の水」と呼ばれている。今でも湧いているというから驚きだ

臥龍山荘、大洲城、おおず赤れんが館、お殿様公園…と、大洲の名所をたずね歩き、その歴史をひもといていくうち、ひとりの人物にたどり着いた。江戸時代の陽明学者・中江藤樹だ。慶長13年(1608)、近江国に生まれた藤樹は、米子藩加藤家の武士であった祖父の養子となり、加藤貞泰公の大洲藩への転封にともない大洲へと移り住んだ。元和8年(1622)に家督を相続し、儒学研究に邁進。寛永11年(1634)、故郷の近江へと帰り、慶安元年(1648)に亡くなるまで、日本陽明学の確立と「知行合一」の道を実践したという。

のちに「近江聖人」と称えられた藤樹に、大洲の人々も尊敬の念を抱いていたのだろう。明治36年(1903)、愛媛県立宇和島中学校大洲分校が大洲中学校として独立した際、その校地の一部に藤樹の屋敷跡が位置していたこともあり、「中江藤樹先生邸址校」と位置づけられた学校づくりを進めたのである。明治40年(1907)には滋賀県の藤樹書院から分けられた「藤樹先生ゆかりの藤」を移植。「遺愛の藤」と呼ばれるこの藤は現在も毎年、初夏に美しい花を咲かせている。そして昭和14年(1939)、大洲出身の工学博士窪田哲二郎の寄付により、藤樹の旧宅になぞらえた書院「至徳堂」が大洲中学校(現大洲高等学校)敷地内に建立された。木造平屋、武士の屋敷を再現した邸内には、高村光雲直系の木彫家関野聖雲による「藤樹先生木像」を安置。こちらは窪田哲二郎の兄弟により寄贈されたものだという。内部も見学でき、大洲高校の文化祭などでは茶道部によるお茶会も開かれていく。大洲高校の伝統的教条は「知行合一」。藤樹の精神は、こうして大洲人に脈々と受け継がれていくのだろう。



文化祭では茶道部がお点前を披露



開校10周年記念事業として藤樹先生邸址碑を建立。題字は東京帝国大学教授であり哲学者の井上哲次郎が揮毫した



イベント&トピックス

おおず歴史華回廊

夏のまち歩きツアー 6月1日(水)～8月31日(水)
《全5コース》予約申込み受付中

- 夏旅1 百年の刻歴史華回廊** ～殿様が愛でた風景と名職人の物語～
肥南編
- 夏旅2 麗しの浪漫華回廊** ～明治に華吹く和と洋の競演～
肥南編
- 夏旅3 女子旅スイーツ華回廊** ～レトロかわいい路地散歩～
肥北編
- 夏旅4 青い海と赤い橋 華回廊** ～浜町長浜をまちなみ散策～
長浜編
- 夏旅5 オプションで龍馬衣装の貸出もあります(1,000円)**
河辺編

夏旅1・2・3・4 お申し込み・お問い合わせ
TEL: 0893-57-6655 (大洲観光総合案内所)
http://www.asamoya.com/kairoh/

夏旅5 お申し込み・お問い合わせ
TEL: 0893-39-2211 (河辺ふるさとの宿)
http://www.kawabe-furusato.com/

郷土の味とたのびね

鉄板焼・ステーキ 美ゆき

一子相伝のソースに感じる心意気
昭和28年創業の「美ゆき」。その名は初代・丸井幸子さんが神戸での修業時代、店の主人から授かった。「幸子(ゆき)」さんの美しい店を」との思いが込められているという。神戸で鉄板焼を学んだ幸子さんは故郷の大洲でステーキをはじめお好み焼きや焼きそば、焼き飯などを提供。

中でも、今や店の看板として親しまれている「ちゃんぽん」は、昭和40年頃、常連さんのリクエストにより生まれた一品。神戸時代に伝授されたソースが旨さの決め手で、レシピは一子相伝。幸子さんから二代目へ、そして現在店を切り盛りする三代目・浩之さんへと受け継がれた門外不出の味だ。「いずれは自分の子どもにこの味を伝えるのが私の使命」と語る浩之さん。家族で守るその味が、「美ゆき」が多くの人に愛され続ける所以だろう。

焼きそばと焼き飯を一緒に焼いた「ちゃんぽん」(1,080円)。テレビなどでも取り上げられ、遠方からの客も増えたという



住所／大洲市中村618-8
電話番号／0893-24-3308
営業時間／11:30～14:00
17:00～22:30
定休日／月曜
(祝日の場合は翌日)



肱川橋架替工事リポート⑤

大洲市民の皆様を支えられ新しく生まれ変わる肱川橋です。

大正2年の初代完成から100年以上、大洲市民の生活を支えてきた肱川橋。現在行われている5代目への架替えに関しては、地震時の耐震性の強化や、川の流れをスムーズにするという治水上の問題の解消、さらに歩道を広げることで歩行者や自転車の通行もスムーズに。今後、今秋の迂回道路への切替を目指し工事を進めていきます。

大洲市立大洲南中学生への測量体験及び鮎の放流

日時／6月14日 8時30分～12時
場所／肱川の河川敷
参加／大洲市立大洲南中学校1年生



今回は、平成27年、28年度肱川橋改良工事の一環として、中学生を対象に行われた中央建設(株)主催「測量体験及び鮎の放流」について、その模様をお伝えします。



最初に、主催者である中央建設(株)現場代理人の松本さんの挨拶があり、次に国土交通省四国地方整備局大洲河川国道事務所建設監督官の藤本さんより、なぜ肱川橋を架け替えるのか、肱川橋架替工事に関する事業概要などが説明されました。



測量体験

1班から6班に分かれ、トランシットという機械を使います。

① 肱川の河原にて、4か所の地点の内角を測定。四角形の内角の和がいくつになるか。



② 肱川の河原から富士山展望台までの水平距離は1000mより長いのか? 高低差は?



という問題に答える形で体験は行われました。



測量という初めての体験に戸惑いながらも、係員の方々に丁寧に教えてもらいながら、生徒のみなさんは一生懸命取り組んでいました。測量は工事の基礎であり、工事をするにあたり一番大事なことは正しい測量を行うことであることを、学べたのではないのでしょうか。

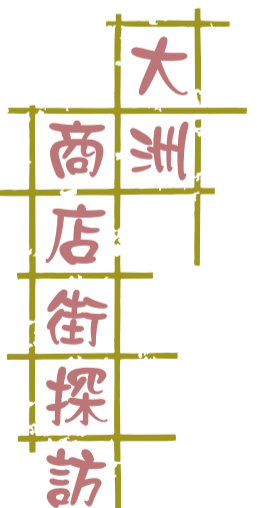
次に、肱川漁業協同組合大洲支部の協力のもと、肱川に鮎を放流しました。バケツに入れた鮎を生徒さん一人ひとりが肱川に放流したり、トラックに積んでいる鮎をホースを使って一度に大量に放流したり、楽しそうに行う姿が印象的でした。



最後は、今春完成したばかりの仮設の橋の上を歩いて渡りました。現在の肱川橋を真横に見ながら歩くことなど普段はできない経験に、「とても良い経験になった」と笑顔が見られました。

中川食品

歴史の風薫る大洲市。その商店街には、代々受け継がれている、活気のあるお店が立ち並んでいます。



ダイヤスポーツ



住所／大洲市中村228-6
電話番号／0893-24-2392
営業時間／9:00～19:30
定休日／なし

スポーツ振興に情熱を注ぎ半世紀 人情味溢れるサービスで愛される

「スポーツが好き」という思いに突き動かされ、大洲駅前でスポーツ用品店を開き、50周年を迎えた「ダイヤスポーツ」。現在は二代目である息子の直俊さん夫婦と、家族で店を切り盛りしている。市内唯一の総合スポーツショップとして、学校への体育器具の納入や、部活動をする生徒・学生へのシューズやユニフォーム、用具の提供など地域密着店としての役割が大きい。

「大型店舗が増える中、生き残るためには私たち小売店にしかできないことをしなければ」と、お客様への細やかな対応を心がけている。その一つがグローブやシューズなど用具の修理。特に高校野球の夏はグローブの修理依頼が多く、店以外で購入したものについても対応。「一生懸命、汗を流す学生を応援したい」その心意気を感じられる。直俊さんは西日本のスポーツ用品のプロフェッショナル27社で構成された「PSB」の勉強会に参加し、修理の技術などスキルアップに尽力。一方で、ノルディックウォークの指導員のライセンスを取得し、公民館などで年配の方を対象にウォーキング指導を行ったりと、幅広い年代でのスポーツ人口の増加を目指している。



住所／大洲市大洲253-2
電話番号／0893-24-2881



大洲の食文化を守り、伝える 地域を元気にするための挑戦

明治36年創業。「町の豆腐屋さん」として、また店先には野菜も日用品も並ぶ、いわゆる「地域の便利屋」として愛されていた老舗だ。四代目に受け継がれた頃から、スーパーマーケットが台頭。時代の流れに合わせて、中川食品ならではの商品開発と、スーパーなどへの卸しを強化していったという。南予地方は木綿豆腐を好む傾向にあり、看板商品「昔づくり木綿豆腐」は、大豆をたくさん使い、水を少なめにすることで濃厚に仕上げた。大豆の風味をしっかりと感じられる一品だ。

さらに、2014年の大洲えもんセレクションでは、南予地方では古くからハレの日などに食されていた伝統食材「しめとうふ」と、大洲産大豆「ふくゆたか」を使用した「すくいとうふ」が認定された。愛知県の豆腐店で修業を積んだ五代目も数年前に帰郷し、イベントへの出品や工場直営店としての整備など、販路拡大を狙い様々なアクションを起こしている。「いずれは地元に戻ってきたいという若者を受け入れていけたら」と語る五代目・雄一さん。若い力が老舗の伝統を守り、地域を盛り上げるべく奮闘している。

